

8月31日(日) マルコの福音書15章29～32節

「おい、神殿を壊して三日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」(29,30節)

29節以下には、十字架を取り巻く三種類の人々の、イエスに対する嘲りやののしりのことばが記されています。まず最初が通りすがりの人たちです。彼らは頭を振りしました。これは、人への軽蔑のしるしです。そして「おい、神殿を壊して三日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」と言いました。彼らはたまたまイエスに対する裁判の内容を知っていたのか、もしかするとイエスの裁判のことが広く知れ渡っていたのかもしれませんが。偽証として裁判で使われた言葉を持ちだして、イエスをののしりました。次に「祭司長たち」「律法学者」たちでした。彼らは「他人は救ったが、自分は救えない。キリスト、イスラエルの王に、今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう。」と言いましたが、これはまさに、自分たちの願望を成し遂げたことから来る満足感とキリストに対する勝利の宣言をもってキリストをあざけっているのです。そして、キリストとともに十字架につけられた強盗たちも、イエスののしりました。彼らは、自らが受けるべき罰を受けているにもかかわらず、なおイエスをののしったのです。

人々は「十字架から降りて来て、自分を救ってみろ」「他人は救ったが、自分は救えない」と言って、キリストをののしりました。つまり、人々はまず自分を救うことを要求しました。確かに人々の要求どおりにキリストは自分を救うことができましたが、自らのからだとともに、キリストは神としての地位、力、権威などすべてを十字架につけて、私たちを罪から救うために、自らを救われなかったのです。言い換えれば、キリストは自らを救わないことで他人を(罪人を)救われたのです。まさに、自分自身を救われなかったことにより、十字架を通して人類の救いが神のみこころの通りに成就したのです。

9月1日(月) マルコの福音書15章33、34節

「そして、三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」訳すと

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。」(34節)

主イエスが十字架の上で発せられたことばは、四つの福音書の記録を総合すると、七つあります。その中の四番目がこの「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」でした。このことばが発せられたのは、午後三時だと考えられていますので、イエスが息を引

き取られる直前でした。鈴木大拙のような仏教徒は、イエスがこのようなことばを発したのは、自分のしたことの報いを受け取った結果だと言い、まさにキリストの敗北宣言であるととらえています。しかし聖書では「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」(コリント人への手紙第二5章21節)とされています。つまりイエスキリストこそ罪を犯されなかったお方であり、処刑される必要がなかったどころか、神によってさばかれることなどありえないお方でした。そのようなお方であるイエスが、あらゆる人々の罪をすべて背負い、そこに注がれる神の怒りから来るさばきをすべてその身に受けてくださったのです。ですから十字架に架けられたキリストは、父なる神の目には愛する御子ではなく、人間の罪そのものになられた者として写っていたことでしょう。

ヘブル人への手紙9章27節に「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように」とありますが、まさにイエスキリストの十字架での姿が神のさばきを雄弁に物語っています。死後のさばきとはひとりで神の御前に立つことです。神の御前に自らの真実な姿、罪の姿をさらされることとなります。そして自らが神の怒りから来るさばきをその身に受けることになるのです。まさにそれは耐え難い苦痛です。そして罪人はそのさばきとのろいのもとに永遠に置かれることになるのです。本来であれば、私たち一人一人が神のさばきを受ける中で、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫ばなければならなかったのですが、キリストの十字架のゆえに罪を赦されて、神のさばきから来る滅びではなく、永遠のいのちに入れられたことは、まさに驚くべき神様の恵みです。どんなに感謝をささげても足りないくらいのことをイエス様はしてくださったことをあらためて思われます。ですから、この救いを受けた私たちは一人でも多くの人に罪からの救いを宣べ伝えたいと思わされます。

9月2日(火) マルコの福音書15章35～37節

「しかし、イエスは大声をあげて、息を引き取られた。」(37節)

イエス様の叫びを聞いた人たちの何人かがエリヤを呼んでいると言いました。(35節) その理由としては、イエス様が発せられた「エロイ、エロイ」の部分のエリヤと勘違いしたのではないかと思います。海面に酸いぶどう酒をつけてイエスに飲ませようとしたのも、「エリヤが降ろしに来るか見てみよう」とのイエスに対する嘲りから出た興味本位の行動でした。

「しかし、イエスは大声をあげて息を引き取られ」ました。マルコは、イエス様の最後のこと

ばが何かは記してありませんが、「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」(ルカの福音書23章46節)「完了した。」(ヨハネの福音書19章30節)の可能性があります。人が最後に口にする言葉で、その人の人生が決まると言った人があります。ある牧師は、「主よ、私のような者をも・・・」と言いつつ召されたと聞いたことがあります。最後まで主のあわれみによりすがって生きてきたことを表す、その牧師の姿が目浮かぶようです。私たちは臨終の時にどのような言葉を口にするでしょうか。私たちが、人生の最後を迎える時に、脳裏に浮かぶのはどのようなことでしょうか。願わくは、後悔や嘆きではなく、主への感謝と主が自分を迎えてくださる喜びでありたいと思わされます。そのためには私たちがイエス様のように父なる神のみこころに従う歩みをさせていただきたいと思わされますし、父なる神が与えられる自らの十字架を負いつつ、主の御跡に従ってまいりたいと思わされます。

9月3日(水) マルコの福音書15章38節

「すると、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」(38節)

ここにある「神殿の幕」とは、聖所と至聖所を隔てる「垂れ幕」(出エジプト記26章31～35節参照)のことです。この幕の奥にあった至聖所には、あかしの箱が安置されていました。この至聖所には、年に一度、全国民を代表する大祭司が、民の贖いのために入ることしか許されていませんでした。つまり、この幕は罪人である人間が聖なる神の前にはそのままでは近づけないことと大祭司による贖罪が必要であることを目に見えるかたちでの象徴として示していました。しかしキリストの十字架の死後、ただちに神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けました。これは二つの大切な真理を意味しています。

まず一つが、神と人とをさえぎる隔てが取り去られたということです。神と人とを妨げていたのは罪でした。イエスキリストによって罪の完全な贖いとなされたことにより、キリストを救い主と信じる者にとっては、もはや神と人とを妨げるものはなくなりました。まさにキリストの十字架の贖いを通して恐れることなく、大胆に御前に出ることが許されているのです。二つ目が、神殿に象徴されるような旧約時代の礼拝制度が廃棄されたことです。エルサレム神殿で繰り返されていたいけにえをささげる行為もキリストはご自身をいけにえとしてくださったことにより無効となりました。また罪のない神の御子であるキリストご自身が永遠の大祭司となられたことにより、もはや人間の大祭司を立てる必要がなくなったので、旧約時代の大祭司の制度も必要なくなりました。(ヘブル人への手紙7章26節参照)ですから、このようにしてキ

リストを通して新しい時代が到来したとも言えるのです。

「こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって、大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」(ヘブル人への手紙10章19、20節)

9月4日(木) マルコの福音書15章39節

「イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られるのを見て言った。「この方は本当に神の子であった。」

百人隊長は、十字架刑を執行するための責任者として、そこにいたのでしょう。ですからイエス様が十字架にかかれた様子を注意深く見ていたと思われます。イエス様が十字架上で「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分っていないのです。」(ルカの福音書23章34節)との祈り、一人の犯罪者の悔い改めの言葉、(同23章40～43節)全地が暗くなる異常な自然現象(同23章44節)「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」との祈り(同23章46節)を見聞きして、異邦人の百人隊長が「この方は本当に神の子であった。」との信仰告白へと導かれたのです。百人隊長がイエスについてそれほど知っていたわけではないということから、この信仰告白に疑問を持つ人々もあります。しかし、十字架上で悔い改めた犯罪者の一人のように、限られた理解の中であっても、そこに真実な信仰告白がなされるなら、主はそれを受け入れてくださると信じます。はからずもユダヤ人たちが受け入れられず、信じることができなかつたイエスは本当に神の子であったとの告白を異邦人の百人隊長がするとは何という皮肉だろうかとも思われます。

イエス様は、十字架での姿を通して、ご自身がまことの神の御子であることを証しされ、それが百人隊長の信仰告白となりました。私たちは、どのようなかたちで自らの信仰を証しているでしょうか。私たちの生活や日々の歩みは主を証しし、私たちの生き様は救いの幸いを証しているでしょうか。イエス様が父なる神のみこころに従い通された十字架の姿が証しとなったように、主に従い通す歩みが目に見える証しとなるのです。

9月5日（金）マルコの福音書15章40、41節

「女たちも遠くから見ていたが、その中には、マグダラのマリアと、小ヤコブとヨセの母マリアと、サロメがいた。」（40節）

マルコは十字架の周りにいた女性たちに言及しています。この中には、財産を献げることで弟子たちの働きを支えていた人たちもいたようです。この女たちの中には、マグダラのマリアがいました。彼女に関しては、ルカの福音書8章2節を見ますと「七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア」と紹介されています。このように女たちの中にはイエス様による癒しを経験することでイエスに従って、仕えていた者たちもいたことが分ります。私たちがイエスに従い、イエスに仕える者たちとされていますが、これまで見てまいりましたようにイエスの十字架の贖いによって罪を赦された者、与えられている恵みに心から感謝し、主にある新しい人生を歩み出した者として、私たちが生涯イエスに従い、イエスに仕える者でありたいと願われます。

そして、この後マグダラのマリアとヨセの母マリアは、イエス様がどのように埋葬されるかを見、（47節）マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメは、香料を買ってイエス様の遺体に油を塗りに行くという愛の行為をしようとするので（16章1節）復活の最初の知らせを聞いたのです、（16章6、7節）イエスが捕えられた時に、イエスを捨てて逃げ出した弟子たちが決して経験することのできなかつたことを彼女たちは経験することができました。私たちがイエス様のもとを離れず、どこまでも従い続けるなら、必ず他の者たちが経験することのできない恵みを経験することができます。そして、実際にそれを経験している人もあるはずです。主に従い続けることは、私たちにとても大きな恵みなのです。

9月6日（土）マルコの福音書15章42～47節

「ヨセフは亜麻布を買い、イエスを降ろして亜麻布で包み、岩を掘って造った墓に納めた。そして、墓の入り口には石を転がしておいた。」（46節）

42節に「さて、すでに夕方になっていた。その日は備え日、すなわち安息日の前日だったので」とあります。これは何を意味していると申しますと、日没をもって安息日に入ることです。その一方で、申命記21章22、23節には、「ある人に死刑に当たる罪過があつて処刑され、あなたが彼を木にかける場合、その死体を次の日まで残しておいてはならない。その

日のうちに必ず埋葬しなければならない。」とされています。安息日に埋葬はできませんから、安息日になってしまいますとイエス様の遺体を埋葬する機会を失ってしまいます。実際にはイエス様を十字架刑にするように仕向けた人たちが埋葬まですべきだと思いますが、それはしませんでした。そこで、アリマタヤ出身のヨセフが、イエスのからだの下げ渡しを願い出しました。

「有力な議員」とは、影響力があつて、人々から非常に尊敬されていた人であつたことも分ります。その一方で彼は「自らも神の国を待ち望んでいた人物」でもありました。ピラトは、イエスがすでに死んだことに驚くとともに、ヨセフの願いどおりにイエスの遺体を下げ渡しました。ヨセフはイエスの遺体を亜麻布で包み、岩を掘って造った墓に納めました。当時、岩を掘って造った墓は非常に高価で、まさにイエス様は丁重に葬られたことが分かります。

ここでヨセフは、「勇気を出して」ピラトのところへ行きました。十字架刑にされたイエスと何か関係があると思われる可能性があるという点では、勇気が必要だったでしょうし、有力な議員という立場上、イエスの遺体の下げ渡しのためにピラトのもとに行くことは勇気が必要だったことでしょう。私たちも日々の信仰生活の中で勇気を出す必要のある場面に直面することがあるかもしれません。そのような時こそ私たちは主に祈って、主が勇気をくださり、主のみこころを行うことができるように助けていただくべきです。主は私たちを見捨てず、必ず勇気をくださいます。